

第三章 ウィーンとベニス

一 ウィーンのパンション

モスクワ滞在が終わり、私たち一行は飛行機でウィーンへ向かった。数時間のフライトでウィーンに着いた。そして、空港で私たちのツアーは予定通り解散となった。解散時のがあまり記憶にないのは不思議である。その先の一人旅のことで精一杯だったので、誰かと別れを惜しむということもなかったということであろう。

さあ、いよいよ一人旅が始まると思った。私の計画ではウィーンには数日滞在し、最初の大きな目的地の一つであるベニスに向かうことにしていた。ウィーンでの宿を思案していたところ、ツアーメンバーの中にウィーンで数日滞在予定のメンバーが何人かおり、それぞれ宿泊先を探していた。その中の一人が「安く泊まれるところ」としてペンションというものがあり、一室を共同で借りるシステムとなっていると教えてくれた——ということ、三人でペンションに泊まることになった。

見知らぬ地で日本人三人が一室に泊まれば、様々な情報交換を行い、場合によっては共同行動することもありそうだが、三人それぞれ既にそれぞれの計画を持っていた。詳しいことを忘れて残念だが、一人はベニスとは違う方向に（不確かだがイギリス方面へ行き、語学の勉強後、コックの修行をするとか）、もう一人は同じベニス方面を目指すとのことであったが、ウィーンでの滞在日数は私より多かった——そういう理由もあり、私は単独行動でウィーンの街を見物することとした。食事はこれまでのバック旅行の豪華な食事と一変し、パンとソーセージ程度で済ませた。りんごが美味しかったことを覚えている。

二 シェーンブルグ宮殿

シェーンブルグ宮殿は、ハプスブルグ王朝の夏の離宮でその美しさは有名とのことであった。市の中心部より南西に約5 kmの位置にある。建物も優美だがその庭園の広さ・見事さは素晴らしいとされている。ただ、下調べをあまりしていなかった私には、庭園にある樹木のカットの形に驚かされた——というよりも違和感を覚えた。樹木を幾何学的にカットすることは西洋の美しさの様式の一つされているようであるが、日本庭園しか知らなかった私には、その時は正直美しいとは思えなかった。建造物の様式には違和感を覚えることはなかったが、植物を幾何学的にカットして見せるという方法には中々慣れなかった。そういうこともあるのか、ウィーンの街の印象は今でも薄い。

なお、ウィーン中心部より、東側——シェーンブルグ宮殿の方向と反対側には、ドナウ川が歩いて行ける距離のところを流れている。今思えば、ドナウ川を見なかったことは残念である。



ウィーン
(ペンションの在った通り)



シェーンブルグ宮殿

三 ベニスへ向けての列車内の出来事

ウィーンからベニスへは夜行の国際列車で向かった。夜のウィーン駅で乗るべき列車を間違わないようにと、駅員に「イズ・ジイス・ザ・ライト・トゥレイン・バーン・フォア・ベニス？」と何度も何度も尋ねた。夜遅くのプラットフォームの情景の記憶は強い。それだけ不安が大きかったと思う。薄暗く人影はまばらだった。心許なかったが何とか間違わずに乗れた。

ここまでは良かったが、その後、この旅の最初のトラブルというものが起こった。このことについては、旅行後、何度も「トラブル伝？」として飲み会などで話したが次のとおりである。

列車内で次のような状況が起きた。

ウィーンを夜遅く出発した列車は、明け方近くとある山あいの駅で泊まった。寒さの中で眠い目で回りを見ると、バックパッカー風のアメリカ人らしき若者たちは荷物を背負い列車を降りようとしていた。私は、トーマスクックの時刻表でベニスへの到着時間は確認しており、まだ到着時間には程遠かった。すると、英語らしきもので次のような会話が始まった。

「さあ、降りるぞ。君も下りよう」

「ノー・ノー。私はベニスまで行くのだ。こんな山の中では降りない」

「いやいや降りる必要があるのだ。降りるぞ」

「親切にありがとう。でも私の目的地はベニスだ。こんなところではない」

「ベニスに行きたいなら、ここで降りるぞ！」

「ありがとう。でもベニスには早すぎる。ここは私の目的地ではない！」

「知らないぞ……」

「????????」



国境越えの駅で
(見えにくい山には雪が)

相手の目はだましているとは思えないし、周りを見渡せば、乗客はみんな降りている。半信半疑だが、ここは他の旅行者に付いて行くしかないと思えてきた。そうして、最終的にはみんなの後ろに付いて行きバスに乗ることとなった。少し走ると係員が乗り込んで来てパスポートを出すように言われた。直ぐに終わり再び列車に乗った。今まで乗っていた列車とは異なっていると思えた。イタリアの列車と思われる。車掌もイタリア語で話しているようであった。なんてことはない。後で分かったことだが、この駅はT A R V I S Oというところで、国境越えのために列車を乗り換える場所であった——現在は、国境が無いためこのような手続きなどは不要なようである。T A R V I S I Oという駅名には自信はないが、この辺りがそういう地名であることは間違いない——こうしてなんとか国境を超え、ベニスへと向かうことができた。

これには後日談がある。先に述べたウィーンで別れたツアーメンバーにベニス駅前で偶然に会った。彼も同じ状況に会い、どうしても降りないと抵抗したら、駅員が来て両腕を抱えられ、無理やりに下車させられたということであった。この国境越えの手続きは、トーマススクックの時刻表では読み取れていなかったし。私が持っていた日本のガイドブックにも一切記述がなかった。トラブルに近い出来事であったが、今では懐かしい。

なお、イタリアの列車がベニス方面へ少し走ると、行人風の人地のオバサンたちが乗ってきた。意味のあることではないが、彼女らの口ひげが異様に濃かったことを覚えている。

四 ベニス散策

ベニスの駅には、午前中の早い時間に着いた。陽のひかりが強く、ウィーンと異なり街全体が急に明るくなった。まずは、宿泊場所の確保だ。駅前のインフォメーションセンターでホテルを紹介してもらおうと捜したが、あいにく日曜日（四

月二十七日)で閉まっていた。しかたなくサン・マルコ広場¹方面に歩いてホテルを捜したが、どうやらホテルは駅前の方が探しやすいということで駅前に戻った。しばらくすると、オジサンが寄って来てホテルを紹介することであった。少し不安だったが、4000リラ(1800円程度か)の宿が見つかった。

こうして、駅から遠くないこじんまりしたホテルに落ち着いた。この旅の中では少し高いクラスのホテルであったが、朝食の場所は運河側の二階か三階のテラスで、気持ち良かった。そのテラスで年配のヨーロッパ系のご夫婦とわずかな会話をしたが、旅を祝福されたように思えた。

そして、ベニスの散策を始めた。

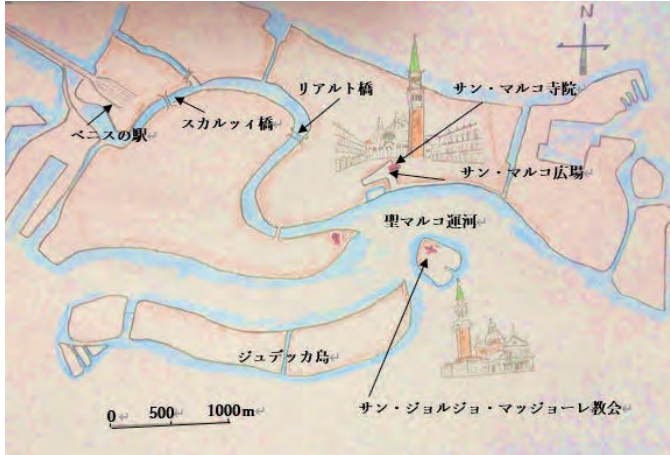
最初の目的地は、サン・マルコ広場である。街のシンボルの鐘楼などなど見どころ満載な場所であるが、予想以上に素晴らしく、観光客で溢れていた。現在ではオーバーツーリズムが課題となっているとのことであるが、それだけの魅力がある名所である。

ホテルから広場への径に架かる橋などからは、有名なゴンドラも多く見られた。『ローマ人の物語』で有名な塩野七生氏の『海の都の物語 ヴェネツィア共和国の一千年』²では、ベニスの街が作られた背景・その経過が詳しく紹介されているが、そんな知識も十分持たないで歩いて回った。歴史を学んでいたらもつと深い観察ができたと思う。ベニスの景観は、今は映画やSNSなど様々な媒体で鑑賞することができ、どれを見ても私の記念写真より圧倒的にその素晴らしさが分かるが『007 カジノ・ロワイヤル』のラスト近くのシーンも印象的である。

歩き回る中で、ウィーンで別れたグループツアーのメンバーの一人と再会し、国境越えのトラブル談の情報交換を行った。(前述)

1 ヴェネツィアの中心的な広場で、回廊のある建物に囲まれ、ドゥカレ宮殿やサン・マルコ寺院などがある。世界で最も美しい広場とも言われている。『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』。2023年7月23日(日) 18:11 UTC URL: <https://ja.wikipedia.org/サン・マルコ広場>

2 冒頭部分での「アッティラが、攻めてくる!」「フン族が、押し寄せてくる!」は迫力満点。ヴェネツィア商人がサン・マルコの遺骨をアレキサンドリアから持ってきた逸話の描写も面白い。新潮文庫 2009/5/28



ベニス（ぜひ本物の地図をご参照、それだけでも楽しめる）



スカルツィ橋（駅前にある）と運河



サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会と運河

昼食・夕食では、魚介類を食べることができた（800円程度で）。とても美味しかったとはがきに書いていた。写真がないのは残念である。

次の日は、ベニスのガラス工房を訪ねた。ベニスのお土産は、ベネチアグラスが有名とガイドブックに書かれていたためと思われる。ガラス工房はたくさんあり、自由に見学することができた。ブルーの小さなグラスを一つ買った。

ベニスの大まかな地図を示す。現地で買った素晴らしい観光地図や絵はがきをきちんと紹介したいところだが、著作権を考慮し断念する。なお、最近、温暖化の影響でベニスの街が浸水被害を受けているとのニュースに接する度に、悲しく不安な気持ちになる。

さあ、次はローマである。



サン・マルコ広場（寺院から運河方向を望む）



ゴンドラの溜まり場



サン・マルコ広場（正面が寺院）



お土産のベネチアグラス



ガラス工房にて